

# 令和六年度入学試験問題 国語（五十分）

二月二日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は13ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答主紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答主紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答主紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この養老院<sup>(注)</sup>では週に一度、老人たちに看護婦さんが何人かつきそって、散歩に行くことになっていた。時夫とおばあさんが出会ったのも、そんな散歩の時だった。もう一カ月ほど前になるだろうか。川ぞいの道でお父さんとキャッチボールをしている時夫を、おばあさんは土手からながめていた。

「行くぞ、時夫」

お父さんがそう言った時、やおら立ち上がったおばあさんはとつぜん、大きな声でこう言ったのだ。

「あんた、トキオ、いうんか。わたしはトキ、いうんじゃよ」  
びっくりするほどしつかりした足どりで、つかつかとちかづいてきたおばあさんは背がひくく、日にやけて、やせていた。

「友達になってくれるかの」

おばあさんは破顔<sup>①</sup>一シヨウ、そう言った。

それから毎日、おばあさんは窓から時夫を見つめていたのだ。あそびに来てほしいのかもしれない、時夫は何度もそう思ったが、その勇氣はなかった。キャベツ畑<sup>②</sup>のむこうの青屋根<sup>②</sup>といえは、子供たちにとって、おばけ屋敷<sup>やしき</sup>もおんなじだったのだ。

けれども、もう決心した。時夫はぐつと胸をはり、キャベツ畑のまん中の細い小道を、どンドン歩いていく。

「もどつてこいよ。鬼<sup>おに</sup>ばあがいるぞ」

「ハンバーグにされちゃうから」

みんなの声が、うしろからきこえてきた。

小さな玄関<sup>げんかん</sup>を入り、病院のような待ち合い室をぬけると階段があり、窓を目印にいくと、おばあさんの部屋はすぐにわかった。色あせた畳<sup>たたみ</sup>の上に冷蔵庫とテレビがおいてある。時夫は帽子<sup>ぼうし</sup>をとつておじぎをした。

「待<sup>③</sup>つとつたよ。これはルームメイトのゆりこさんに、げんさんに、ひさしさん。これは私の友達のトキオ」

おばあさんはじゅんぐりに紹介<sup>しょうかい</sup>し、冷蔵庫からジュースをだしてくれた。おばあさんが「ルームメイト」という言葉を使ったのがなんとなくおかしくて、時夫の心の中でくすつと笑い、緊張<sup>きんちやう</sup>が、するつとほどけた。

「毎日毎日、カンけりしとつたなあ」

おばあさんが言つて、

「トキさんはまた、それを毎日毎日、見とつたなあ」

ひさしさんが言つた。ひさしさんは白髪頭<sup>しらか</sup>を短く刈<sup>か</sup>つた、色白のおじいさんだ。

「見ていると、私もいっしょに遊んでいるような気がしおつてね」

おばあさんははずかしそうに笑うのだった。

ゆりこさんと呼ばれたおばあさんは長い髪を左がわでおさげに編んで、白い浴衣を着ていた。部屋のすみの赤い座布団の上にすわって、一心にお手玉をしている。時夫の視線に気がつくのと、しずかに、ふわっと笑った。小さな、白い、あどけない顔だった。

「アイスクリームがあるからおおあがり。あなたのために買うといたに」

おばあさんが言った。紙のカップに入ったバナラアイスはかちかちにかたまつて、冷蔵庫のにおいがついていていた。

(中略)

その日以来毎日、学校から帰ると時夫は養老院に遊びにいった。おばあさんがどっさり持っているおはじきや昔のお金、古い写真や思い出話は、冷蔵庫でひえているアイスクリームやバナナよりもっと魅力的だった。

ある日、おばあさんが時夫を散歩にさそった。

「ホームの庭は、きょうちくとうがさかりだからね」

ほんとうに、ぼつてりと紅いきょうちくとうの花が、夏の日ざしの中で眠たそうに咲いていた。セミがうるさく鳴いている。

「たまには気をきかせなくちゃね」

時夫がきよんとしていると、おばあさんはいかにも重大

な秘密のように、

「ゆりこさんとげんさんよ」

と言った。時夫はまじめな顔で、

「へえ」とこたえたが、なんだかふしぎな感じだった。おじいさんとおばあさんでもへーIをしたりするなんて、時夫には思ってもみないことだったのだ。

(中略)

「とにかく、養老院にばかり遊びに行くのはよしなさい」

それまでテレビで野球をみていたお父さんが言った。

「どうして」

「どうしてもだ」

友達になったのに行っちゃいけないなんてことあるもんか。時夫はふくれつつらをして、エビフライにかじりついた。

夏休みも半分がすぎたころ、時夫がいつものようにおばあさんの部屋にあそびにいくと、階段の上にはげんさんが立っていた。白いランニングシャツから、やけた腕をこつこつとだして、やつぱりたばこをすっている。

「もう、トキさんのところに行くのはやめた方がいい」

時夫は腹が立った。お父さんならまだしも、げんさんにそんなことを言われるすじあいはない。

「どいて下さい」

まっすぐおばあさんの部屋に歩いていく時夫のうしろ姿

を、げんさんは階段の上に立ったままみつめていた。

ドアをあけると、おばあさんは窓のそばにすわっていて、時夫をみても知らん顔だった。

「こんにちは」

時夫があいさつすると、おばあさんはふかぶかと頭をさげた。

「おとといから、急にボケちゃったんですよ」

ひさしさんがあっさりと言い、おばあさんはぼんやりと、窓の外をみていた。時夫が半信半疑のまま立っていると、とつぜん、おばあさんがかん高くさげんだ。

「トキオッ。トキオじゃないか」

おどろいている時夫にしがみついたおばあさんは、ものすごいぎょうそうで髪をふり乱していた。

「やつとみつけたよ、トキオ。もうにがすもんか。ここから出しとくれよお、トキオ。死んでもいっしょだよね。友達だもんね」

ほそくてしわだらけの腕の、いったいどこにこんな力があつたのか、げんさんが入ってきておばあさんをおさえてくれたあとも、<sup>④</sup>時夫はしばらく動けなかった。背中がつかなくて、ひぎに力が入らないのだ。部屋の奥<sup>おく</sup>では、ゆりこさんがお手玉をしていた。ひさしさんはおすもうをみている。

やっぱり鬼ばばあだ。<sup>⑤</sup>みんな鬼ばばあと鬼じじいだ。

「ちきしょう」

時夫は、そうさけぶが早いか駆<sup>か</sup>けだしていた。こわくて、くやしくて、涙<sup>なみだ</sup>がとまらないのだ。目のすみで、きょうちくとうの花がゆれていた。

それから、時夫はカンけりの日々にもどり、青屋根でのできごとは、誰<sup>だれ</sup>にきかれても口をきつくむすんだまま、こたえようとしなかった。そのうちにみんな青屋根のことは何も言わなくなった。学校に行き、学校から帰り、晩ごはんまで表であそぶ、いつもの生活がもどってきたのだ。いつのまにか、秋がきていた。

「時夫みーつけっ」

ゆたかの声をして、時夫は、誰かがゆたかより先にカンをけつてくれることをねがいながら、マンシヨンの植えこみからごそごそとはいだした。次の瞬間<sup>しゆんかん</sup>、<sup>⑥</sup>時夫はびくんとからだをかたくした。前から、おじいさんが二人とおばあさんが二人、二人の看護婦さんにつきそわれて歩いてくるのだ。週に一度の散歩の日だ。時夫は、心臓がとびだしそうにドキドキし、ゆびさきがぞわっとつめたくなった。かくれたいのに動けない。おじいさんは、げんさんとひさしさんだった。おばあさんは、ゆりこさんともう一人、知らないおばあさんだった。

「やあ、トキオくん。ひさしぶりだね」

ひさしさんが、片手をあげて言う。

「……はい」

時夫がやっとの思いで返事をする、ひさしさんはっこり笑って、

「こちらはヤエさん。青森出身なので、出羽の花がひいきなんですと」

と、うれしそうに言った。そのおばあさんは大がらで、ざんぎり頭だった。黙りこんでいる時夫の疑問にこたえるように、げんさんが言った。

「トキさんは、ちがう部屋にうつった」

時夫はほっとした。何だ、死んだわけじゃないんだ。そんな時夫の気持ちをみすかしたように、げんさんはにやっと笑って、ごつごつした手をゆりこさんの背中にまわし、ゆりこさんをかばうようにして行ってしまった。

(中略)

その日はずっと、あの老人たちの姿が時夫の頭からはなれなかった。新しいルームメイトと楽しそうにしゃべっていたひさしさんを思い出すと、<sup>⑦</sup>時夫はひどくいやな気持ちになるのだった。

(中略)

僕には関係ない。いくらそう思ってみても、気持ちはちっ

とも晴れなかった。

次の日も、その次の日も、時夫の頭のすみに、おばあさんのことはひっかかったままだった。ボケると、部屋をつされちゃうんだろうか。今度も、ルームメイトがいるんだろうか。ボケたら一人部屋になるのかもしれない。あばれるから、ろうやみたいなの部屋かもしれない。時夫の胸にろうやの中にぼつんと一人ですわっているおばあさんの姿が、うかんできた。ぞつとして、頭をふり、いやな考えをおいだそうとした。

「いくぞーっ」

でこぼこのカンをめがけてゆたかが走ってくる。あ、オレ、鬼だったっけ。ゆたかがカンをけり、時夫はそれをひろうと目をつぶって十かぞえた。みんながかくれにくい足音をする。

「……七、八、九、十」

ぱっと目をあけると、秋の日がさしたキャベツ畑がへいごしに見え、その向うの青屋根の、はじっここの窓におばあさんの顔がのぞいていた。おばあさんの目は、ぼおつと、無表情に、時夫をみつめている。

「オレ、ぬけるっ。ごめんっ」

かくれているみんなに聞こえるように思いきり大きな声でそう言うと、時夫はへいをよじのぼった。

夢中で走ったので、青屋根についた時には息がきれて、肩もおなかも、はあはあ波うっていた。階段をのぼり、はじつこのドアをノックすると、細い声はいい、とこたえた。⑧そこはちゃんとした畳の、テレビも冷蔵庫もある部屋だった。病院のようなベッドが二つおいてあって、おばあさんはベッドの上にぺたんくとすわって外をみているのだった。もう一つのベッドには誰かが寝ていた。ふとんを頭までかぶっているの、時夫には、それがおじいさんなのかおばあさんなのかもわからなかった。

「こんにちは」

時夫が礼儀ただしくおじぎをすると、おばあさんもおじぎをした。時夫のことは、まるで覚えていないようだった。ずいぶん小さくなったみたい気がする。時夫とおばあさんはむきあつたまま、黙っておたがいの顔をみつめていた。とつぜん、おばあさんがにたと笑った。顔全体がふにゃつとくずれるような、奇妙な笑い方だった。

「バナナ、食べるかい」

「うん」

「冷蔵庫からだしておあがり」

「うん」

「わたしはトキ、いうんよ」

「うん」

「あんたは？」

「時夫」

おばあさんはきよとんと、目をまるくした。

「ふうん。あんた、トキオ、いうんか」

「うん」

「わたしはトキ、いうんよ」

「うん」

⑨時夫は、何度も「うん」をくりかえした。そのたびに、おばあさんはうれしそうににたと笑うのだった。

学校から帰ると、時夫はまた毎日、おばあさんのところに遊びに行くようになった。けれどもいつも、ほんの十五分だった。十五分するとおばあさんは疲れて、ことんと眠ってしまうのだ。

(江國香織『つめたいよるに』所収「鬼ばあ」より)

※出題の都合上、文章の一部を変えたり省略したりしたところがあります。

(注1) 養老院……現在の「老人ホーム」と同義。

問一 — 線部①「破顔一シヨウ」について、カタカナ部分の漢字としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 勝      イ 生      ウ 笑      エ 賞

問二 — 線部②「青屋根」とは何のことですか。文中から三字でそのまま抜き出して答えなさい。

問三 — 線部③「待つとつたよ」とありますが、おばあさんが長い間待っていたことがわかる一文を探し、最初の五字をそのまま抜き出して答えなさい。

問四 文中の「I」にあてはまることばを一語で答えなさい。

問五 — 線部④「時夫はしばらく動けなかった」とありますが、時夫が「動けなかった」理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おばあさんの腕の力が強く、痛みにひるんでしまったから。

イ 何が起きたのか理解が追いつかず、思考していたから。

ウ 前は優しかったおばあさんのひょう変ぶりに驚いてしまったから。

エ おばあさんの余命が残りわずかなことに気づいてしまったから。

問六 — 線部⑤「みんな鬼ばあと鬼じじいだ」とありますが、なぜ時夫はトキさんだけでなく「みんな」を「鬼」だと考えたのですか。四十字以内で説明しなさい。

問七 ——線部⑥「時夫はびくんとからだをかたくした」とありますが、その理由として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あれ以来、養老院には一度も顔を出していなかったから。

イ あの日に怖い思いをしたきっかけであるトキさんが来たと思ったから。

ウ 友達に養老院の人たちとの関係を知られるのが嫌だったから。

エ あの日急に養老院を飛び出してしまったので気まずかったから。

問八 ——線部⑦「時夫はひどくいやな気持ちになるのだった」とありますが、その理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時夫のことを全く心配してくれなかったから。

イ あの日の出来事がなかったかのように振る舞ったから。

ウ 新しいルームメイトのヤエさんが、おばあさんとは全く違う印象の人だったから。

エ トキさんがいないことを気にせず新しいルームメイトと話していたから。

問九 ——線部⑧「そこはちゃんとした畳たたみの、テレビも冷蔵庫もある部屋だった」とありますが、この部屋の様子を見たときの時夫の気持ちを考え、四十字以内で説明しなさい。

問十 ——線部⑨「時夫は、何度も『うん』をくりかえした」とありますが、「時夫」はなぜ、あいづちを繰り返したのですか。その理由を二十字以内で説明しなさい。



二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

格差社会というのは、成員たちが単一の度量衡<sup>①</sup>で格付けされる社会のことです。ただ一つの度量衡で格付けできるからこそ、格差が発生するのです。それが昔の階級社会と違うところです。

階級社会では、それぞれの階級ごとに価値観が違っていました。貴族と農民は単に同列にないというのではなく、同類でもありません。まるで違う種族に属していたのです。ですから、何かのはずみで立場が入れ替わるといことも想定されていない。平民が貴族になりたいと羨望<sup>せんぼう</sup>するということはないし、仮に願っても、そのためのキャリアパス<sup>注2</sup>そのものが存在しなかった。

(中略)

私たちが今いるのは格差社会であって、階級社会ではありません。それは全員が同一種族だということが前提になっている社会だということです。

ある意味では、きわめて②な社会だとも言えます。能力や業績が数値的に比較可能であるということは、とりあえずそれ以外の条件がぜんぶ同じだということが前提にあるからです。

実際に平等かどうかは知りません。でも、例えば学力を比較する場合には、成績のよい子と悪い子は、同じ条件で競争しているという話になっている。彼らの間の差異<sup>i</sup>に<sup>ii</sup>関与<sup>かんよ</sup>するのは、先天的素質と後天的な学習努力だけであるという話になっている。年収を比較する場合も同じです。高い収入を得ている人間と低い収入に甘んじている人間は、同じ条件で競争して、その才能と勤労努力の差によって差別化<sup>iii</sup>されている、という話になっている。

学校でも職場でも、つねに順位の入れ替えは可能であるという話になっている。そうしないと数値的に差別化する意味がありませんから。

③格差社会は、階級社会とその点が違います。その点をしっかり踏まえていないといけない。そして、④格差社会の最大の問題点はここにあります。

年収によって格付けされるということが理不尽<sup>りふじん</sup>だというのではなくて、人々は等しい条件で競争するのではなく、現に等しい条件で競争しているという前提そのものが「嘘<sup>うそ</sup>」だからです。

実際には勉強でも仕事でも、人々は「等しい条件」で競争しているわけではありません。初めからアドバンテージを享受しているものがおり、<sup>(注3)</sup> 重いハンディキャップを背負わされているものがある。にもかかわらず、「これはフェアな競争である。勝者が総取りし、敗者が路上で野垂れ死にしても、それは自己責任である。勝者になるチャンスは全員に等しく開かれている」ということだけがアナウンスされている。でも、実際にはそうではないのです。

アドバンテージを握っているものは勝ち続け、ハンディを背負っているものは負け続けるという、<sup>(注5)</sup> フィードバックのなかった競争が行われている。にもかかわらず、「等しい条件で競争が行われている」という話になっている。そして、この「フェアな競争」で負けて、生活が立ちゆかなくなった人々を公的システムが支援することを「アンフェア」だと言い募ることが、今では「ふつう」になっています。

改めて言うまでもないことですが、社会保障システムが支援するのは社会的弱者たちです。競争に敗れた人たち、競争からおりの人たち、そもそも競争に参加することを許されなかった人たち、そういう人たちを社会保障は支援する。そういう「競争からこぼれた人たち」は、どんな社会集団にも一定数含まれています。幼児、老人、障害者、病人、孤児、異邦人、そういう人たちです。彼らが集団のフルメンバーとして十分な自尊心を維持して暮らせるように、社会制度は設計されなければなりません。忘れている人が多いようですので、確認しておきますけれど、社会集団は弱者ベースで制度設計されるべきものです。弱者が弱者でありながら、成員のフルメンバーとして認知され、十分に快適な生活を過ごせ、十分な自尊心を維持できるように、集団は設計されなければならない。当たり前のことです。

A、成員の全員が強者であり、健全であり、高い生産性を持つている場合にしか機能しない集団があったとすれば、そんな集団は一世代も保たないでしょう。B、人間は必ず他人に扶養されなければ生きていけない幼児だった時期があり、必ず他人に介護されなければ生きていけない老人になり、高い確率で障害者や病人になり、戦乱や飢饉があれば、故郷を離れて言葉も通じない異郷をさまようリスクを負っているからです。C、そのような状態に陥ったときにも「ちゃんと暮らせる」ように、制度的な備えをしておかなければならない。

別に慈善を施しているとか、博愛事業をしているわけではありません。幼児は「かつての私」であり、老人は「未来の私」で

あり、障害者や病人や異邦人は「そうなたたかもしれない私」だからです。「私がそうであつたもの」「そうなるもの」「そうなるかもしれないもの」をすべて「私の変容態」だと見なすことができれば、集団とは端的に弱者を支援するシステムのことだという意味がわかるはず⑥です。

昔オイディプスは、「朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足の生き物とは何か？」というスフィンクスの問いに、「人間」と正解しましたが、それが人間についての、ある意味では根源的な定義なのです。人間は生きている間につきつきと別のかたちの生き物になる。移行期には二本足半とか一本足半とかいう過渡的形態を取ることだってあります。

しかし格差社会というのは、いわば「二本足」の人間は個人的努力によって「二本足」になつたのであり、努力が足りないせいで「四本足」や「三本足」といった非機能的な歩行をするものよりも上位に位置づけられ、より多くの資源配分に与る権利がある⑦という考え方をする社会なのです。

⑧だから、社会格差が拡大するにつれて、「児童虐待」や「老人虐待」が顕在化してきた⑧ということは、無関係ではないと僕は思います。

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(内田樹『街場の共同体論』より)

- (注1) 度量衡……長さ・重さ・体積などのこと。また、それをはかる基準となる単位のこと。
- (注2) キャリアパス……目指す職業や地位につくまでの道筋。
- (注3) アドバンテージ……有利な地位。
- (注4) フェア……公平正大である様子。反対の意味を表すのが「アンフェア」。
- (注5) フィードバック……効果や結果を分析して、その後の修正や調節に活かすこと。
- (注6) オイディプス……古代ギリシャ悲劇の作品に登場する王の名。

問一 文中の A C にあてはまる語を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア だから      イ 例えば      ウ もし      エ しかし      オ なぜなら

問二 ——線部①「単一の度量衡<sup>どりようこう</sup>で格付けされる」とありますが、具体的にはどのようなもので格付けされるのですか。それにあたるものを文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問三 文中の ② にあてはまる語としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 経済的      イ 差別的      ウ 民主的      エ 論理的

問四 ——線部 i iv という話になっている」とありますが、これらの言葉はどのようなことを表そうとしているのですか。

次の中からもっとも適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 正しいことだとして、みんなが納得<sup>なっとく</sup>しているということ。  
イ 実際はちがうが、正しいことのように思われているということ。  
ウ 不満はあるものの、しかたなく従っているということ。  
エ はつきりしないが、そのような情報があるということ。

問五 ——線部③「格差社会は、階級社会とその点が違います」とありますが、「格差社会」は「階級社会」とどのような点が違っているのですか。次の中からもっとも適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同じ条件の下で競争した結果、勝ち抜いた者を頂点とする新たな身分の序列が生まれるという点。  
イ 年収や年齢<sup>ねんれい</sup>や性別のちがいを越<sup>こ</sup>えて、人間はだれでも一人の人間として尊重されるという点。  
ウ 先天的素質が不足している人間は、生きるために身分や家柄<sup>いえがら</sup>に頼<sup>たよ</sup>らざるを得ないという点。  
エ 身分や地位に関係なく、個人の競争の結果によって富や名誉<sup>めいよ</sup>を手に入れることができるという点。

問六 —— 線部④ 「格差社会の最大の問題点」とありますが、それはどのようなことがらを指していますか。文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問七 —— 線部⑤ 「重いハンディキャップを背負わされているもの」とありますが、これと同じ人たちを指す語を文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問八 —— 線部⑥ 「『朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足の生き物とは何か?』というスフィックスの問いに、『人間』と正解しました」とありますが、「朝は四本足」とは、人間の一生の中でのどのような様子を表現していますか。二十字以内で説明しなさい。

問九 —— 線部⑦ 「『二本足』の人間」とは、どのような人間をたとえた表現ですか。「……人間」という語に続く形で文中から二十五字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問十 —— 線部⑧ 「社会格差が拡大するにつれて、『児童虐待』や『老人虐待』が顕在化してきた」とありますが、格差社会でこのような特徴がはつきりとみられるようになったのは、児童や老人がどのようにとらえられているからだと考えられますか。二十五字以内で説明しなさい。

三次の短文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 道路のカイシユウ工事をする。
- 2 区役所のチヨウシヤを建てかえる。
- 3 町のフツコウを願う。
- 4 校門でシユエイさんにあいさつする。
- 5 過ちを広い心でキヨヨウする。
- 6 セツドのある行動を心がける。
- 7 採れたての野菜をシユツカする。
- 8 紅葉した山はすっかり秋のヨソオいだ。
- 9 命令にフクジユウする。
- 10 思い出のナミキ道を散歩する。



令和六年度入学試験 二月二日 実施

東京女学館中学校

国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一  問二  問三  問四  問五

問六

問七  問八

問九

問十

二問一 A  B  C  問二  問三

問四  問五

問六

問七

問八

問九  人間

問十

三

9	5	1
10	6	2
	7	3
	8	4
	い	

評点



受験番号

氏名